

Z112a 日本の太陽観測史における長野県の個人観測者たちの活躍

陶山徹（長野市立博物館）、長野県天文文化研究会メンバー

太陽黒点観測はもっとも歴史のある継続的な科学観測の一つである。1600年代初頭、Thomas Harriot（1560 – 1621）や Galileo Galilei（1564 – 1642）が望遠鏡で太陽を観測して以来、400年を超える歴史がある。日本における最初の継続的な太陽観測は、1888年、東京天文台（現在の国立天文台）の平山信によるものとされているが、残念ながら、これらのスケッチは失われてしまっており、現在、国立天文台のホームページで見られる最も古いスケッチは1938年のものである。

より古い1920年代の継続的な太陽観測記録も現存している。それらは長野県の天文家によるものである。一人は旧制諏訪中学（現在の諏訪清陵高校）で地理学の教師を務めた三澤勝衛である（図1）。もう一人は望月町（現佐久市）で農業を営んでいた田中静人である。三澤の観測期間は1921 – 1934年、田中は1926 – 2000年である。いずれも国内最初期の継続観測記録であり貴重である。

三澤と田中は、研究所や観測所に所属する職業研究者ではない、個人観測者である。二人の例は、近年、注目されることが多くなった市民科学の好例と言える。本発表では、三澤と田中の二人に焦点を当て、日本の太陽観測の黎明期において、個人観測者が果たした役割を明らかにする。